



「日本のみなさんありがとう」と学校再建予定地の子どもたちからのメッセージ／アフガニスタン

わたしたちには
ひとりひとりに
かけがえのないのちがあり、
価値があります。

ひとりひとりの尊厳を守り
誰もが、自信と勇気をもって
自分たちのちからで
生きていけるように。

JENはこれからも
サポートしていきます。

私たちが大切に
していること。

ミモザトーク

mimosa TALK

Talk for Peace,
Action with Smile



vol.03

想像し、考えることで課題を見つけだす。

今回のミモザトークは、国際ジャーナリストの千田善さん。1983～93年の間に、のべ10年近くを、セルビアとスロヴェニアで暮らし、旧ユーゴスラビア紛争を最前線から報道され続けました。旧ユーゴ紛争の教訓から、今私たちができる事をお聞きしました。

木山 旧ユーゴスラビアの紛争以前に、これは戦争になると感じましたか？

千田 最初は戦争になるとは思っていなかったし、民族主義が起り始めても、何が起きているのか分からないんですよ。民族主義的な政治家が権力を握っていく中で、おそらくナショナリストとして、アクティブに動いた人は、少数派でした。でもその少数派が唱える、民族主義とか愛国主義、「国を愛そう」、「国を守ろう」という考えは正しく聞こえる。それが「われわれは被害者」「悪いのはあいつら」と敵対心へと進んでいったのです。それを解きほぐして、分かってもらうには何倍もエネルギーが要るんですよ。

木山 私が出会った旧ユーゴの人びとの中に、振り返ってみると戦争が始まるまでに様々な分岐点があったが、自分たちは戦争に至る道を全ての分岐点で選んでしまったのだ、と言う人がいました。日本でも、議論が尽くされないまま様々な法案が通って行く中で、自分たちが行動しないことが、戦争に向かわせているのでは、と危機感を持っています。

千田 確かに、2014年位から、秘密保護法、集団的安保、武器禁輸解除など、鍵になる大きな

法律が制定されて、もうやろうと思えば戦争が始められるし、反対する人は逮捕できるし、というような法制度が完備された状態になっています。あの時自分は何をしたんだろうかというような、忸怩たる思いは、もう沢山の人が持っているでしょうね。

木山 それでも、まだ戦争は始まっていない日本で、私たち一人一人が出来ることはなんでしょうか。

千田 情報を手に入れて「想像し、考える」ということでしょうか。戦争がおきたら、どんなことが起きるか、と想像する。例えば、中国が攻めてきたらどうなるかを、軍事的な観点だけではなく、経済学者から聞いてみる。中国でも戦争を望まない人が多いとわかるはずですよ。どんな話からでもいいんです。人道支援とか、人権とかエコロジーとか、色んな所から、平和の問題というのとはつながっている。ただね、その時に抽象的な話にしないこと。色んな人の意見を聞く、データを調べて考える。そうすると、初めてそこからどうすればいいのかという話が出てくると思うんです。あとは長期的には、子どもの教育なんだろうと思うんですよ。平和の問題だけじゃなくって、いじめの問題とかもすごく関わってくる。相手をリスペクトするとか、自分以外の人が何考えているかっていうのを想像できる『イマジネーションの力』とでもいうのでしょうか。

木山 本当にそうですね。単純そうに見える出来事に複雑な背景がありますものね。そのイ

マジネーションの力で課題を見つけ出し、解決に向かうための行動を起こすには、自分の行動が何かに結び付くと思えることが大切です。JENの自立を支える活動では希望と自信をもって生きられる様に、成功体験を積み重ねていける活動にするよう心がけています。最後に、私たちが一歩を前に踏み出そうと思える、ヒントを頂きますか。

千田 そうですね。1つ言えるとするれば、長いこと生きてくると、あの時は絶対変わるはずがないと思っていたことっていうのが、どんどん変わってきたっていうことかな。それがいい方向に行くのか、悪い方向に行くのか、っていうのは我々次第です。色々悲観的なこともあるけれども、諦めないで、好奇心を持ってやっていきたいな、という風に僕自身は思います。

木山 いいお話をどうもありがとうございました。

対談の続きはWEBで!
<http://www.jen-npo.org/mimosatalk>

TALK with

千田 善(ちだ・ぜん)

1958年、岩手県生まれ。国際ジャーナリスト、通訳・翻訳者。立教大学講師、ベograd大学大学院中退。専門は国際政治、民族紛争、異文化コミュニケーションなど。外務省研修所、一橋大学、中央大学、放送大学などの講師を歴任。元サッカー日本代表オアシム監督専属通訳。サッカー歴40年。

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

*控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 JEN

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。



アニメーションを通じて、衛生の大切さを伝える「モバイル・シネマ」上映会。子ども達に大人気です。



アフガニスタン略歴

- 1919年 第三次アフガン戦争、イギリスから独立
- 1978年 軍事クーデター「四月革命」、アフガニスタン民主共和国樹立
- 1979年 ソビエト連邦侵攻
- 1987年 アフガニスタン共和国樹立
- 1989年 ジュネーブ合意に基づきソ連撤退
- 1996年 タリバンがカブールを占拠
- 1999年 タリバンが国土の9割を支配
- 2001年 タリバン政権崩壊
- ボン合意(暫定政権の発足と今後の和平プロセス合意)
- 2004年 アフガニスタン・イスラム共和国樹立、新憲法制定
民主主義選挙により選ばれた
ハミッド・カルザイが初代大統領に就任
- 2009年 第二回大統領選挙でカルザイ大統領が再選
- 2014年 アシュラフ・ガニーが大統領就任

パキスタンから帰還した人びとへの緊急支援を実施中

アフガニスタンでは、たびたび起こる紛争の影響で多くの人びとが難民となり、隣国パキスタンで暮らしてきました。中には、30年以上も避難生活をおくった人びともいます。昨年以降パキスタンとの間の政治的緊張により62万人^{※3}以上の人びとがアフガニスタンに戻ることを余儀なくされています。多くが、家財道具を売り払うなどして帰国しているため、彼らの生活基盤を立て直すための支援が必要です。JENはパキスタン国境近くのナンガハル州ジャラバードとその周辺にて、1,000世帯を対象に生活を再スタートするための物資配布を行っています。



※3 出典… UNOCHA / 2017年1月時点

特集:アフガニスタン

「学校に行くことが楽しいです！」 その気持ちを支えたい。

アフガニスタンの人びとは、この40年近く内戦や自然災害と向き合ってきた。タリバン政権崩壊から16年、未だ国は復興の途上にあります。JENは2001年からアフガニスタンでの活動を開始しました。以来、首都カブールの北西に位置するパルワン県で学校の再建や修復、衛生教育、防災・減災教育などを行っています。



教育を受けることの大切さ

「以前私たちの教室はテントでした。椅子も机もなく、床にマットを敷いて授業を受けていました。この学校にしかないトイレは汚れていることが多く、ドラム缶に貯められていた水で手を洗っていました。両親は私に学校をやめて自宅で勉強するように言いました。でも、私は友だちと一緒に勉強をしたいと思っていました。今は校舎やトイレがきれいになったので、友だちと一緒に学校に行くことが楽しいです」と語るのは、12歳のムサルさんです。

アフガニスタンでは不安定な経済状況により、教育・保健に充てられる予算は決して多くはありません。そのため、教育環境の整備が進まず、子ども達の就学率は、男の子が62%、女の子が46%^{※1}と低くその結果、15歳以上の識字率は男性が52%、女性が24%^{※2}と低い状態です。

低い就学率の背景には、子ども達が学校に通いにくい環境があります。例えば、教室やトイレが破損していること、汚いことが主な理由です。加えて、特に女子生徒は男子と共同で使用するここの拒否感があります。更には、男子と同じ学校に通うことを家族が好まないことや、そもそも女子には教育は不要だという価値観が一部の大人の間にあります。このような状況を改善するために、JENは教育環境を整えています。

JENはパルワン県で2002年から学校の校舎やトイレ、手洗い場などの衛生施設の再建や修復を開始しま

VOICE

娘には、夢を 実現してほしい。



娘や妹と学んだ手洗いの実践をするナルギスさん(右から2番目)

ナルギス・アームド・アリさん

タリバン政権の頃、私達家族はイランに逃れ、2003年にアフガニスタンに戻りました。ほとんど父が病気で亡くなったことは今も辛い記憶です。その後、チャリカ市に引越して、女子学校に入学しました。学校を卒業後、すぐに結婚し今は小さな娘がいます。もっと勉強したかったです。が、経済的に叶いませんでした。娘には夢を実現してほしいと願っています。今は、妹が学校でJENの衛生教育や防災教育に参加しています。私は、彼女から下痢を防ぐための経口補水液の作り方や、地震の備えを学びました。地震が起こったら外に逃げるのが良いとは限らず、今はどうすべきか判断できるようになり、すこし勇敢になりました。食べ物や水に蓋をすることを実践したり、小さな娘は、石鹸で手を洗うようになったんですよ。

した。これまでに、県全体464校のうち127校と県外の3校に対して学校の再建・修復、衛生施設の修復を行いました。さらに、256校の生徒約23万人と教師7千人に衛生教育の大切さを知ってもらうための衛生教育を行いました。

復興のただ中にあるアフガニスタンは、地震や地滑りなどの自然災害にも脆弱です。そこで2016年より防災・減災教育も始めました。防災・減災教育は教師に対して研修を行い、教師が子ども達に自分の身の守り方、他の生徒を救護する方法などを伝えます。ある女子学校の校長は、「以前は、災害に対して知識がなかった。地震で地面が揺れたときにはパニックになって叫んだり、我先にと校舎から目散に走りだし怪我をしてしまう子もいました。今は、避難経路図があるし、地震が起きたらどうしたらよいかの知識もある。準備万端です」と話してくれました。

子どものチカラ

子ども達には「伝えるチカラ」があります。彼ら彼女らは、自分自身の行動を変えるだけでなく、ごく自然に生活の中で家族やコミュニティの人びとに知識を広めてくれます。

大人たちに衛生知識に関するヒアリングを行った時、「今では自分の身の周りの衛生環境にとっても気を配っている」といった声を聞きました。JENの取り組みがコミュニティの人びとへ少しずつ変化を起こしていたのです。近い



「地震が来たら頭を守りましょう!」初めての防災訓練はドキドキです。

※1 出典… UNICEF / 初等教育の就学率 / 2014年時点 ※2 出典… The World Factbook / 2015年時点

将来、「子ども達が学校に通うことで、自分たちの生活も変化する」と親が気づく時、教育の価値を再認識する大人たちが増え、その結果、学校に通う子ども達が増えていくことを願っています。

教育は、これからのアフガニスタンの復興と発展に欠かせません。経済の復興に加えて、教育こそが数十年にわたつてこの国に欠けてしまった「社会の安定」をもたらす一番の希望となるのですから。





1日50円からできる支援
生きるちから
マンスリーサポーター

1

ご参加はホームページから。
www.jen-npo.org/monthly/

2

月々の定額をご指定ください
(月々1,500円から)。
ご寄付はクレジットカード決済
または金融口座引き落としを
お選びいただけます。

3

翌月からも、定額の寄付を毎月
引き落としとして継続いただけます。

例えばこんなことができます。

月々1,500円 × 1年
アフガニスタンの生徒36人に衛生
キット(せっけん、タオルなど)を配布。

月々2,000円 × 1年
イラクの避難民276人に石けん
2個と洗剤を配布。

月々3,000円 × 1年
パキスタンの帰還民120人に、
農業研修を実施。

月々5,000円 × 1年
スリランカの12家族に野菜の
種と農具一式を配布。

www.jen-npo.org

JEN マンスリーサポーター 検索



PC・スマートフォンから
アクセスできます。



モスル奪還作戦を逃れて来た人びとが避難生活をおくる。建設途中の建物

イラク

緊急支援開始
まっ先に、そして
最後のひとりまで
寄り添う

モスル奪還作戦が始まった昨年10月以降、イラクは転換期を迎えています。JENは、モスルから220キロ離れたサラハディーン県の臨時キャンプに避難する約1800世帯(約1万人)に、越冬物資の配布を開始しました。以前のモスルは、約170万人が暮らす都市として活気に溢れていましたが、2014年、武装勢力に制圧されて市民の生活は一転しました。モスル奪還作戦以降、半年程の間に20万を超える人びとが、生活の場を追われています。彼らのための避難所は学校やモスクなど急ごしらえの建物が多く、日常生活を送るための設備が全く整っていない所もあります。今回、緊急支援を行ったキャンプは建設途中の建物を利用したもので、屋根はあるものの窓はなく、雨風が入ってくる中、人びとが肩を寄せ合っていました。砂漠気候のこの地域は、冬になると最低気温が連日零度近くまで下がります。支援活動では、まず雨風を凌ぐためのプラスチックシートと、冷たいコンクリートに直接触れることによる体温の低下を防ぐための、毛布とマットレスの配布を行いました。人びとは、極限の状態から解放された、と喜んでいました。彼らが元の生活を取り戻せる日まで、JENは避難民に寄り添っていきます。

※1 出典：IOM 2017年3月時点



清掃チームは街をきれいにするだけでなく、ここに暮らす人たちの悩みを聞く役割もあるんだ。話を聞くと、みんな何かの役に立ちたいと言っているよ

数日前にお子さんが生まれたばかりのオマールさん。キャンプ内の清掃チーム^{※2}の一員として活躍中です。



世界中の人たちに、僕の絵を見てもらおうのが夢なんだ

仮設住宅の中にはイヤッドさんが描いた絵が敷き詰められていました。1つ1つの絵には、シリアへの郷愁や想いが込められていました。



こうやって、皆と集まってお話ししながら、いろんなものを作っているの。楽しいわよ

JENのアップサイクルプロジェクトに参加しているオム・ルアイさん。古布から手工芸品を制作・販売する活動を通して、心のケアや生活の質向上につなげることを目指しています。

ヨルダン

小さな声を
伝える

JEN広報担当の井上が
ザイタリ難民キャンプを
訪問した際に出会った
人びとをご紹介します。



※2 キャッシュ・フォー・ワークという支援形態により、JENが作業に対する対価をお支払いし、彼らの生活をサポートしています。



土を耕し、苗を植え、水をやる。スタッフ(写真右)もともに汗を流します。

パキスタン

ともに悩み
ともに喜ぶ

2008年から続いた反政府武装勢力と政府との戦闘により、故郷である連邦直轄部族地域(FATA)のハイバル管区を離れた人びとは、長い人で5年以上、避難生活を送ってきました。帰還を果した人びとが目の当たりにしたのは、あらゆる施設や、家々が破壊しつくされた故郷でした。JENは、こうした帰還民の方々の生活の再スタートをサポートするために、2015年から農業再開の支援を始めました。翌年には隣接する南ワジリスタン管区でも活動し、今では小麦やトウモロコシや葉野菜をたくさん収穫できるまでになりました。私たちはたびたび農地を訪れ、帰還民の方々が作物の収穫量を順調に増やし、得た収益で生計を立てている様子を目にしました。先日訪れた村では、家族に食べる物があふれ、着る物があり、子どもたちが学校に通っている姿がありました。中には、自分の稼いで持病の治療費をまかなっている人もいました。これまで避難生活で大変な思いをしてきた人びとの状況をよく知るからこそ、私たちにあって彼らの生活の改善に少しでも貢献していると感じられることは最大の喜びです。近い将来、人びとのもとに平和や繁栄が戻ってきて、再び自立した生活を送れるよう、これからもサポートしていきます。



井戸が完成し、農業の再スタートにも気合が入る村人とJENスタッフ(写真右)。

スリランカ

決して
あきらめない
強い気持ち

北部キリノッチ県にあるタンバマム地区は、内戦の最前線となった地です。ここで暮らしていた人びとの多くは、25年以上故郷を離れ友人や親戚の家に身を寄せて暮らしていました。帰郷した現在も、身内や友人を失った悲しみのみならず、紛争の際に負った傷の影響を受けています。更に、終戦から7年以上経った今でも、この地域の復興は遅々として進まず、多くの家庭が貧困の状態から脱することができず、苦しんでいます。最近ではアルコー依存や子どもへの虐待などの問題も深刻です。このような状況下での支援活動には、粘り強さが不可欠です。住民自身が内戦で被った経験と向き合い、立ち直り、人生に対して前向きな気持ちをもつようになるまでには、相当の時間がかかるからです。JENの活動では、住民同士が共同で一つの目標に向かい作業を行うことで、協力し合う機会や話し合う機会をつくり、それを繰り返してコミュニティ全体の信頼関係を健全な状態へと導きます。この地域では、農業活動を通して住民同士の協力を促しています。これは農作物の販売などの商業活動を軌道にのせるためにも重要です。JENは、活動に参加している人たちが、互いに協力し合い収入の向上につなげ、生活を再スタートするきっかけを得られるよう、今後も最大限の努力をしていきます。

私たちが大切に
していること

自然災害や、紛争の影響で、
厳しい生活をおくることを余儀なくされた人たちは
一日も早く、もとの生活に戻りたいと願っています。
私たちは、彼らの「生きるちから」をひきだすことを
大切に、ともに歩んでいきます。

東北

誰ひとり
取り残されることのない
復興を目指して

昨秋、震災直後にJENが立ち上げを支援させていただいた石巻のコミュニティスペースが閉館となり、その式典に出席させていただきました。「震災で家族を亡くし、あまりのショックで当時涙も出なかったが、5年が経って、やっと最近涙が出るようになった。この場所が心のよりどころだった。みんなで集まっておしゃべりする場所がなくなってしまったのは本当に寂しい」と利用者の一人は話してくださいました。

被災地では復旧工事が進んでいます。各地に設置された復興商店街には、賑わっている所もあれば、閑散としている所もあります。JENは牡鹿半島に、震災で店舗を失った16軒が入居できる商店街を設置し、初期の運営をサポートさせていただきます。

震災から6年が経ち、多くの支援団体が活動を終え被災地を去っています。一方、復興の速度についてゆけず、心のサポートを必要とする人や生活再建のスタート地点に立てない人が確実に存在します。JENは2015年秋から、地域課題の解決と震災復興に果敢に取り組み東北3県7団体のパートナーとして、彼らの活動をサポートさせていただきます。ひとり親世帯をサポートする子ども食堂、男性介護者をサポートする団体、地元若者たちが中心となり新しい地域づくりに取り組む団体、新



JENとパートナーシップを組む7団体が、合同研修を行いました。

しい防災を実施する団体など、アイデアと知見、ネットワークを活用して地元復興に真摯に取り組む人たちがいます。

災害によって生まれる大きな変化のひとつとして、災害前から存在した地域課題が顕在化・深刻化することがあります。過疎、高齢者、介護の問題やひとり親世帯の生活再建など、もともと脆弱だった人びとは、被災によってさらに厳しい環境に置かれてしまいます。こうした人びとが復興から取り残されることなく、再び安心して暮らしを営むためには、きめ細かなニーズに応えること、息の長い支援が必要です。JENはこれからは「誰も取り残されない社会づくり」をスローガンに、被災地の復興を支えてゆきます。(事務局局長代行黒木明日丘)

熊本

熊本の明日を描く
未来の起業家を応援

熊本地震から間もなく1年が経ちます。震災直後の物資配布、瓦礫撤去支援等を経て、今、JENでは復興を担う起業家育成支援として「明日のくまもと塾」(通称ASUKUMA)を開催しています。「熊本の未来を創る」という意欲ある方々の事業創出を持続的にサポートするASUKUMA。少しずつその芽が出始めています。

ASUKUMA参加者の事業アイデアは多岐に渡っています。コミュニティカフェ、女性の仕事づくり、観光振興など、いずれも参加者の経験と人脈を生かしたアイデアです。阿蘇高菜をつくる若い女性農業従事者は、「震災前は、お店を空けてさえいけば観光客が買ってくれるという感覚でしたが、震災後観光客が激減した。商品をつくり、県外でも買ってもらえなければ」と話します。阿蘇でしか取れない阿蘇高菜は、手摘みで新芽を収穫するので手間暇がかかる上、後継者不足にも悩まされていますが、種を使ったマスタードを作り始め、阿蘇高菜の新しい価値を見出して販売に奮闘しています。人材育成のプロジェクトとしてASUKUMAをリードする一般社団法人ファミダスの濱本伸司さんは「震災により様々な社会課題が顕在化し、課題を解決できる人材なくして真の復興はないと痛感した。課題に取り組む人の多くが個人で



ワークショップでは、まず熊本の現状や、課題を洗い出しました。

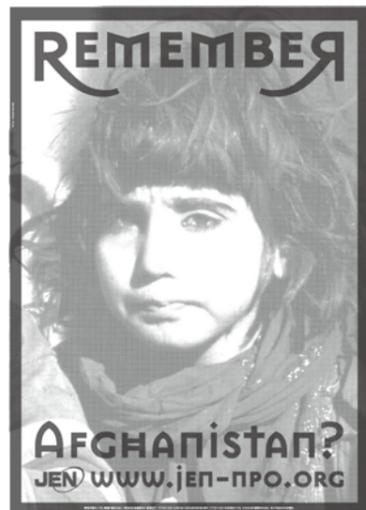


事業アイデア発表前の最終確認中。JENスタッフ(写真右)。

動いている。今後復興に向けて連携を強化する仕組みを作りたい」と話します。熊本発の個人、NPO、企業。地元に対して熱い思いを持つ方々が、課題に向き合い、連携を強化しながら活動を続け、震災前よりも希望のある熊本の未来を思い描けるよう、JENは今後も伴走してまいります。

緊急支援の最前線を行く

誰もが注目しない深刻な人道危機が、静かに訪れている



アフガニスタンを忘れない/Remember Afghanistan? キャンペーンのポスター(他にTシャツやハガキもお問い合わせいただけます)

※1 出典…公益社団法人 国際農林業協働協会2015年
※2 出典…世界保健機関2015年

アフガニスタンでは、30年以上にわたり貧困と紛争が続き、近年ではテロによる治安の悪化といった負の連鎖が続いている。人びとは故郷を離れ国内の「少しでも安全」と言われる地域へ避難している。終わりの見えない避難生活は、人びとの暮らしや国の復興に大きな影響を与えている。

この国の妊産婦死亡率は世界でも最低レベルだ。国土のほぼ全域において、インフラ整備の遅れをはじめ基本的な生活を営むための環境が整っていない。たとえば、食糧不足あるいは栄養の偏りによって全人口の27%が栄養不足に陥っている。70%以上の市民は、整備されたトイレや手洗い場などの衛生施設を利用できていない。*

近年、国際社会の関心の

低下は極めて深刻な事態だ。2015年以降アフガニスタンでは、安心・安全な暮らしを求め、パキスタンやイランに逃れ難民となっていた数十万もの人びとが強制送還される事態が起きている。長ければ30年以上難民として国外で不自由な暮らしを営んできた人も含まれる。彼らこそ、声をあげることができない最も脆弱な人々だ。誰も注目しない深刻な人道危機が、静かに訪れている。

JENは2001年にアフガニスタンで支援活動を開始して以来、国の復興と人びとの生きるちからを支える自立支援を行ってきた。今回の緊急事態にも現地職員と東京本部、そして支援者の皆さまとともに強い連携で

乗り越えたいと願っている。

私たちは、アフガニスタンの未来に明かりを灯す可能性を諦めない。2003年、JENは、「アフガニスタンを忘れない」というキャンペーンを発表した(写真左)。あれから14年が経ち、状況は改善するどころか、悪化の一途を辿っている。急増する帰還民が尊厳をもち安心して温かく冬を越すための緊急支援が急務だ。JENは、彼らが冬を越すための毛布など、日用品の配布を行い、その後

はこれまでどおり生活を再建するための支援を行う。春を迎える頃、30年ぶりに故郷に戻った人びとが、安心して生活を再スタートできることを願っている。(文:シリル・カップパイ/グローバル事業部・部長)

▶参加方法

1 不要な洋服やバッグ・アクセサリーをダンボール箱に詰めます。



3 寄付アイテムをFCPに届けてお送りいただくと、FCPのサイトで販売いたします。



2 PC・スマートフォンから寄付を申し込みます。※(株)wajaのユーザー登録が必要です。

www.waja.co.jp/fcp/



4 商品が売れると、売上金額はJENの活動資金として役立てられます。



ファッション・チャリティ・プロジェクト

Fashion
Charity
Project



不要なファッションアイテムを
寄付しませんか?

ファッション・チャリティ・プロジェクト(FCP)とは、ファッションアイテムの寄付とお買い物で、社会貢献できる通販サイトです。クローゼットの整理をかねて、ぜひご参加ください。

www.jen-npo.org/fcp/



※販売価格やタイミングは(株)wajaの基準によります。